

2003年12月17日

人間科学研究科委員長殿

笠間千浪氏の博士学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱を受け審査をしてきましたが、2003年12月17日に審査を終了しましたので、ここにその結果を報告します。

記

1. 申請者氏名 笠間千浪

2. 論文題目 象徴的支配における文化的抵抗

3. 本論文の主旨

本論文は、権力／支配問題の圏域が物質的次元にとどまらず、象徴的次元に深く関与していることに重きを置く視座にたっている。ここでいう象徴的次元とは、単なる心理的要因を指しているのではなく、ある社会の状態の正当性が成り立っている局面で構築され、行使され、内面化され、自明なものとして秩序化する過程に絶えず関与している非物質的次元のことである。とりわけ本論文では、当該社会において社会的／歴史的に形成された序列化を伴う差異／格差の関係（物質的・象徴的次元の諸資源の不平等配分）がいかにして「当然／自然」化され、ついには自明視されるにいたるかについてのメカニズムに着目している。

そのようなメカニズムにおいて作動している権力／支配は、近代以降、それ以前の権力／支配と比べると「不可視」化しているという特徴をもっている。もちろん、可視的で物理的暴力はなくなったわけではなく、むしろそれらは日常的領域においてミクロな網状組織のように張り巡らされた「不可視」の権力／支配と深く連動しているのである。

本論文では、「不可視」の権力／支配が作動する軸として非経済的要因の近現代的カテゴリーであるジェンダー、「人種」、エスニシティなどを選び、それらを射程に入れながらも、特にジェンダーの軸を主題化するゆえに、本論文はジェンダー研究の一環としての性格を持っている。

本論文は方法論的には不可視の権力／支配メカニズムをピエール・ブルデューの象徴的支配論とミシェル・フーコーの権力分析の考え方を援用し、潜在的な権力／支配の不可視の構造を解析している。また、両者の視座を再構成し、日常的世界における慣習行動の領域や身体的次元に浸透して主体形成に作用する権力／支配に焦点をあわせ、ジェンダー秩序の権力／支配における不可視性を解明している。

本論文では、象徴的支配の抵抗の契機が推測される日常的な文化実践の場／空間の具体例を分析することによって、抵抗形態の潜在化ないし多様化の一面が理解できるし、象徴

的支配の根強さや複雑さも再認識することにもなる。同時に、本論文は抵抗の新しい主体性の萌芽がはぐくまれ存在するようになる可能性についても言及している。

4. 本論文の構成

本論文は、三部構成をとっている。第一部は 3 つの章から構成されていて、社会学を中心とした社会・人文科学において象徴的領域である「文化」が、しだいに主題化してくる現象（「文化的転回」）と、そこでのプロブレマティークを考察している。

第 1 章では、社会学と人類学における文化概念の系譜の概略と「文化的転回」以降の新しい文化概念について検討している。なお、「文化的転回」とは、特に 1980 年代以降の社会・人文諸科学における「文化」の主題化と、それに伴った文化領域への「問いの構造」の変革の全体的な志向のことをさしている。

第 2 章は、なぜ文化領域の研究が増加してきたのかについての背景を問題にしている。まず「消費」行為の象徴的次元が卓越化の有力な手段となり、象徴的な意味づけに依拠していること、卓越化の手段は物質的次元のみに依拠していないことなどが再発見される。近現代におけるメディア装置の発展によって、表象／イメージが重要な戦略として採用されると、象徴的領域は日常生活に深い影響を及ぼすようになる。また、「文化的転回」の背後における認識論的な変容も文化への研究を促進することを論じている。

第 3 章は、文化を均質的・固定的なものにとらえる見方から、ヘゲモニーをめぐる「アリーナ」として場・空間をみなす見方が優勢になってくる変遷について、文化／象徴的次元と権力を関連させながら考察した研究の系譜をたどっている。

第 2 部は 3 つの章から成り、被支配側が意図せずにその支配に荷担してしまうほど、当該社会の秩序の正当性を誤認（＝承認）しており、自分の抑圧を誘導してしまうような不可視の権力／支配である「象徴的支配」のメカニズムが作動している有様について考察している。

第 4 章は、「象徴的支配」のメカニズムについて、フーコーとブルデューの所論を相補的に援用しつつ分析することを試みている。まず、先行研究における権力と支配の区別、権力／支配の「不可視性」をとらえようとした系譜をたどり、そこにおける意義と限界を探っている。次に、第一に、権力／支配が不可視化するメカニズムとして、近代以降の西欧社会に現れた「法的権力」以外の新たな権力形態とその技法の総体である「生 権力」（フーコー）を手がかりにする。第二に、近現代の主体形成の二つのあり方（客体化と主体化）が権力／支配の不可視化に及ぼす側面を考察する。第三に、社会秩序の正当化における象徴的なものの関与について検討する。そして、ブルデューの象徴権力／支配論を概観し、象徴的権力／支配の代表例として「男性支配」のメカニズムを分析する。

第 5 章は、不可視の権力／支配を解体あるいは変容させる契機（抵抗や異議申し立て）に関する研究分野（社会運動論）における「文化的転回」を考察している。そこでは A・メルッチを軸として異議申し立ての可視的な側面よりは、日常的で潜在的な側面が重要視さ

れていることの意味を考察している。

第 6 章は、抵抗形態に関するもう一つの主要な研究分野であるサブカルチャー研究やメディア研究の先行研究を概観し、「抵抗 / 対抗」概念の問題性も射程に入れながら検討している。本論文では、「抵抗」概念の明確化のために物語論的アプローチを導入し、「優先された意味構成」としての「支配的物語」からの偏差を基準に「抵抗」概念をとらえている。サブカルチャーにおける女性の担い手の暫定的な類型化も試みている。

第三部は 3 つの章をもっている。象徴的支配における抵抗形態は、日常的な文化実践の中で行われる可能性が高く、しかも拡散し、断片化し、多様化する傾向にある。具体例として女性によるサブカルチャーを検討しながら、抵抗の困難性と萌芽性の両面を分析している。

第 7 章は、まず女性によるサブカルチャー（事例としての「やおい」）創出の由来を、消費社会の高度化と女性表象の「性愛化」の過剰（体制的性文化）と関連付けて描き出している。次にこのサブカルチャーの場 / 空間において繰り返されている「やおい」物語の〈文法〉を分析する。それは第一に、男性の「性愛化」表象である〈受男〉表象と、第二に、制度や規範に縛られない純粋に「個性」同士が惹かれあう関係性の希求である。

第 8 章は、「やおい」サブカルチャーについての先行研究を検討した後、「やおい」というサブカルチャーの場 / 空間において、なにが「賭け金 = 争点」になっているのかについて、当事者達へのアンケート調査やヒアリングを使用しつつ分析する。そこで「やおい」サブカルチャーにおける異端の表象である〈受男〉表象は、現行ジェンダー秩序のドクサの陰画であるという新しい解釈が提示される。

第 9 章は、ジェンダー秩序のドクサが（〈女の第三項化〉）と「やおい」サブカルチャーが創出している表象が構造的に対応しているということである。したがって、「やおい」サブカルチャーが創出している表象が構造的に対応しているということである。「やおい」サブカルチャーにおける真の「賭け金 = 争点」は、ジェンダー秩序のドクサをめぐる象徴闘争である。このことは、象徴的支配への抵抗が困難なこともしめすが、集合的にドクサに挑戦する表象をうみだす場 / 空間 = アリーナを通して新しい主体性が生成される可能性も存在することが指摘されている。

5. 本論文の評価

偶然と必然は原理的に背理の状態にあるけれども、必然とは偶然の洞察であると定義されると二つのことばは一つの系の中に収まるようになる。本論文は「知られていない（社会的な）法則は自然であり、宿命である」が「いったん知られた法則は自由の可能性」（227 ページ）につながるという原則的な考え方に立って、幾回も行われている文化的転換の中にまぎれこんでいる象徴的支配の不可視のヴェールをフーコー、ブルデュー、メルッチたちの先行研究の論理を駆使してとり除き、可視化する試みを行っている。この試みは、次のような理由で首尾を遂げていて、しかも彼らの論理の筋道をたどって使い易い形にその論

理を再提示しているところに、本論文の第 1 の肯定的な特徴がある。

ドクサ (doxa) という象徴的文化の大海原にいとすれば、ではどうすれば現在位置を確認できるだろうか。「ある社会において当然のこととして論議なしで受け入れられた意見の総体」「言うまでもないこととしてまかり通っているものすべて」を指す、このドクサに囲まれていて、場合によっては方位基点を求めない処方、あるいは求める処方ともどもに象徴的支配と概念化して本論文は考察するものである。象徴的支配は可視的でもあるし不可視的でもあるけれども、われわれが生きている複合社会では見えたとすの筋道を見失う、あるいは見ようとしても見えてこない場合、それは視力の問題であるけれども、同時に視点の問題でもある。象徴的支配は視点の問題も提起している。この視点は不可視なものを可視化するために、先行研究を丁寧に整理しなおして、たとえば「分類可能な慣習行動や作品を生産する」働きと「それらの慣習行動や生産物を差異化、識別評価する」働きを持つハビトゥス (ブルデュー) の概念を用いて、権力 / 支配の不可視性の所在をつきとめ、可視化を試みる。あるいは社会的差異の理屈を解説する手がかりを提供する。

直接的で物理的な暴力は公的空間では一般に制約を受けているけれども、マスメディアを介しての象徴的暴力は不可視であるゆえに複雑で新しい問題を提起している。A.メルツチの社会運動論は、複合社会の文化状況の潜在的側面と可視的側面の関係に分け入り、支配的文化コードに対抗する潜在的ネットワークの領域を確認し、そこで文化の公示文化と運動する地点に文化的抵抗の基盤をみている。ここには本論文の標題の受けとめ方が表れている。本論文が先行研究を巧みに読みこみ、それを利用して複雑な現象を解説する好ましい実例によって「視力」よりも「視点」の大切さを提示しているところに、本論文の第 2 の大きな特徴がある。

ジェンダー、「人種」、エスニシティ、階級などの社会的差異は、社会的には不均衡に配分されていて、それらは歴史的に構築され体系化されている。しかもこの体系の中で序列化されると、それは「知能」「本能」「DNA」などにもとづく「自然的差異論」に読みかえられ、自明化される。この仕組みは「誤認 = 承認」という象徴的関係のヴェールの下で不可視化され、権力 / 支配の仕掛けとして仕上げられ、いわば身体化される。偏見は偏見ではなく正論としてまかり通ることになる。幾重にも重なっている文化基層からの出口はどこにあるのか。複合社会の文化カテゴリーを再検討することは象徴的支配下の文化的抵抗の企図と通じあう。本論文の全体は主体が主体らしくあるために企てる文化的抵抗の存在可能性を論証している。これが本論文の第 3 の実践的な特徴である。

この特徴は次のような第 4 のジェンダー問題をめぐる特徴となって示されている。権力 / 支配の不可視性に注目すればするほど、象徴的な次元での抵抗は重要になる。しかし、この次元の文化状況や記号的側面は非対称的になり易く、この状態を突き崩すに足りる理論モデルをつくり出すまでにはいたらなかったとフーコーは見ていた。M. フーコー、A.メルツチ、P.ブルデューたちの学術上のコミットメントは相違があるにしても、複雑な文化コードを読み解き、非対称性を突き崩すことにおいて収斂している。本論文はここに収

斂した知性がサブカルチャーの側にジェンダー秩序を引き寄せ、それぞれの違和感を共有しつつ、ドクサに挑戦する学術上有効な表象を創造していく技を「やおい」というジェンダー現象の分析において受け継いでいる。

本論文は、現代日本の学術の分野で今日なお影響力をもっている主としてヨーロッパ系思索家の思想の現場を涉猟し、彼らの重要な概念や表象を咀嚼して象徴的支配と文化的抵抗にまつわる有様を読み解いている。その手腕は、以上において要約して示したとおり首尾を遂げるほどに見事である。

笠間千浪氏が提出した博士号請求論文『象徴的支配における文化的抵抗』は、以上の評価をふまえ、博士（人間科学）に値すると審査委員会は判断するに至った。

2003年12月17日

笠間千浪氏学位申請論文審査員会

主査	早稲田大学教授・文学博士（早稲田大学）	濱口晴彦
副査	早稲田大学教授・博士（人間科学）（早稲田大学）	蔵持不三也
副査	早稲田大学教授・学術博士（筑波大学）	寒川恒夫